

題名 私の決意 ~未来の酪農人に伝えたいこと~

名前 山岸 美咲

年齢 17

とわの森三愛高校 2年

私は幼い頃、いろいろな職業に憧れ、「あれになりたい、これになりたい」といろんな職業を口にしていました。獣医師、声優、保育士、いろいろあった将来の夢、その中で今現在、私になろうと思い、高校で学んでいて、一生私から離れないもの、それが『酪農』です。

私が『酪農』を一生の仕事と決めたのは小学五年生の時でした。我が家におきたある事件がきっかけです。

私の実家は北海道の士別市というところで酪農を営んでいます。冬には積雪も多く、氷点下マイナス三十度近くまでいく厳しい環境です。その地で私の曾祖父は酪農を始めました。曾祖父は満州へ渡り、戦後引き上げし、開拓者として北海道の地に渡り、数頭の牛で酪農を始めました。祖父の代では頭数を増やすため、牛舎を建てることになり道からお金を借りようとしたのですが、開拓者という理由で借りることができず、国に掛け合い、国からお金を借り、牛舎を建て牛を増やしました。そんな曾祖父と祖父を継いで私の父も、自動給餌機などをいれ、機械化をはかりました。経営も波に乗り、乳質も上がり、何もかもがうまくいっていた矢先、ある事件が起こったのです。

私が小学五年生の海の日のことでした。我が家の本牛舎から火があがり、一瞬にして牛舎を炎が飲み込んでしまいました。

夕方の搾乳時間、その日はいつもの時間になってもバルクの洗浄音が聞こえないことに不思議思っていた矢先、外が騒がしくなり、出てみると、今の時間は搾乳をしているはずのうちの牛舎が炎に包まれていました。母が外から牛舎に向かって叫んでいました、

「お父さん、お父さん！出てきて、早く出てきてよ！」

必死に叫んでいました。しかし中にいる父には届きません。中には父の他に祖母と研修生がいます。私も必死に叫びますが、やはり届きません。中で必死に牛を助けようとしている父達には外の音など入ってこなかったのでしょうか。

しばらくして消防車も到着して消火が始まりました。消火が始まってしばらくすると中から祖母が出てきました。疲れ果てて出てきた祖母は、牛舎の中でいつ上から物が落ちてくるかわからない中、必死に牛の鎖を外ずし続けたそうです。祖母の無事は確認できたものの、父と研修生は、まだ中にいました。そのうちに、市内の酪農家さんたちが集まってきました、この時、酪農家の繋がりの強さを改めて感じました。酪農家さん達は、来てすぐに牛舎から出てきた牛を見て「牛が生きてるぞ！早く育成舎でも乾草庫でもどこでもいいから、とにかく牛を入れろ！」誰かの一言と同時に皆がいっせいに走りだしました。そんな中、母が叫びました。

「誰か中から出てきた、早く見てきて！早く！」私は駆け出しました。父の安否も研修生の安否もまだわかっていません。中からでてきた人は研修生でした、研修生は中で父と一緒に最後の最後まで牛を外へ逃がそうと頑張っていたそうです。それからしばらくすると窓から人影が見えました。

父でした。父は、私を見るなり叫びました。「おい！ボッサとすんな！牛を逃がすな。動

け！」その声でまた私は駆け出しました。『牛を助けなきゃ、早く安全な場所へ』その思いだけで、皆が必死に動いていました。

牛舎から出てきた牛の中にはひどい火傷をおって立てない牛もいます、肌がただれて、皮が焼け落ち、血が流れでて、真っ赤に染まっている牛がほとんどでした。

この火事で牛舎は全焼、牛は牛舎にいた半数の三十頭が焼け死にました。死んだ牛達をそのときの私は見ることはできませんでした。火も鎮火し、残るは搾乳だけとなりました。近くの農家さんがバケツを持ってきてくれて、業者の方が育成舎で搾乳できるようにしてくれて、いろんな人達に助けてもらいながら搾乳しました。

機械化を進めていた我が家ですが、バケツで搾乳し、一回一回バルクまで運び、手でバケツなどを洗浄しました。そのときほど、機械のありがたみが感じた日はありませんでした。

搾乳も終わり、すべての作業が終わったのは夜の十一時過ぎでした。いつもならこの時間にはもう布団の中にいます。家に上がってきた父は疲れきった顔をしていました。夕飯を食べる気力すら皆ありませんでした。

その日は夕飯も食べずに家族で話し合いをしました。今後、『酪農』を続けるのかを。そのとき、私の心の中である決心が決まりました。小さい頃から酪農を目にし、肌で感じて生きてきた私、父と母が仕事をいる背中をずっと見てきた私には酪農以外の仕事をしている父の姿が想像できませんでした。そして何より、曾祖父、祖父、父が築いてきた酪農をここで止めたくない、その思いでいっぱいでした。

私は父に私の思いを伝えました「私がお父さんの後を継ぐから、もう一回一緒に『酪農』を始めようよ」父は何も言いませんでした、否定も肯定もしませんでした。

次の日の朝、父と母はいつものように起きて仕事をしていました。酪農家の皆さんも手伝いに来てくれて、二番草で忙しいのにもかかわらず、自分の家の仕事もそっちのけできてくれました。これが酪農家の良いところなんだなとつくづく感じました、この酪農家さんの中にあるこの繋がりの強さに私は惹かれました。

気持ち的にも落ち着いてきたとき、父が私に言いました。本当に酪農で食べていく覚悟があるのかと。私は迷うことなく父に言いました。「私にできる仕事は酪農だけ、私のやりたいことも酪農だけ」それだけ聞いて、父は何も言いませんでした。

それからしばらくして、体も仕事に慣れを感じはじめた頃、父は私を連れて北海道の酪農家さんをまわりました。どうせ建てるなら良い物を、孫の代まで使えるものを、それが父の口癖になっていまして。この事件をきっかけに私は『酪農』の道に一歩足を踏み入れました。

それから私は進路を決める際には、『酪農』を中心に考えるようになりました。高校から『酪農』を学べる学校、それが魅力で私はとわの森三愛高等学校に入学しようと決めました、父も付属の大学を卒業しているので、父と同じ場所で学びたいという気持ちもありました。

父にこのことを話すと父は強く反対しました、いまだかつてないぐらいの大喧嘩を父としてしまいました。父は私に地元の高校に行くように言いました。父は私に「地元に戻ってきて酪農をするなら、地元の友達との付き合いもあったほうがいい」と言いました。しかし、私は「地元にも私は成長できない」と反発しました。最後の最後まで私も父も譲りませんでした。父が最後には折れてくれて私の気持ちを尊重してくれました。父の言っていたこともわかりますが、その時の私は酪農を早くから学びたいという気持ちが強くて仕方ありませんでした。

念願叶ってとわの森三愛高校に入学してからは、驚きの連続ばかりでした。地元の公立高校では、することのできない貴重な体験ばかりだったのです。

私は高校に入学してすぐに、前から興味があった共進会をやりたいと思い、共進会班にはいりました。私の家では共進会をしていないので何もかもが初めての経験でした。共進会班では江別近郊の酪農家さんの手伝いをします。今までギャラリー側だった私には初めてのことでした。共進会の手伝いもちろんです。自分の家いがいの酪農家さんで仕事をするということも初めての経験でした。初めて人の牛を触る、しかも共進会牛、汚したら大変だと、一人緊張していました。

共進会に出てくる牛はどれもキレイで体も大きく足もしっかりしていて乳房も形がいい子たちばかりで、良い勉強になります。いまのうちから牛を見る目を身につけて将来の牛づくりに役立てたいです。

そのキレイな牛をもっとよくみせるために毛刈りとリードマンが必要になってきます。毛刈りをするにより背線の弱い牛も良く見え、いいところがよりいっそう引き立ちます。リードマンはただ牛を引っ張るだけでなく、牛をより良くみせるように引っ張ります。リードマンしだいで牛の見え方も変わってきます。

共進会では、酪農家さん達の助け合いも多く見られます。どんな場面でも酪農家は助け合い、支え合っていることが共進会でも再確認できました。将来は私も共進会でうちの冠名が目立つぐらいの牛を育てたいと考えています。

他にも私が高校に入って、経験したことがあります。それは、牛の胃の中に手を入れたり、牛の解剖をみたり、今では珍しいコンパクト積みなど様々なことを経験しています。

今まで学んだことと、これから学ぶことを生かして、私は将来は観光牧場をしたいと思っています。今ただ酪農をするだけでは、父の後ろをまるまる引き継ぐだけになってしまいます。父のやってきた酪農を生かしつつ、私自身の『酪農』も取り入れていきたいのです。

観光牧場といってもいろいろありますが私がやりたい観光牧場は、小さい子ども達でも安心して搾乳などができる体験型牧場です。私自身、小さいころから牛と触れ合っていたので、あまり牛を怖いと感じたことはありませんでしたが、普通の小さい子どもなら怖いと感じると思います。それをなくせるような体験を多くの子どもたちにさせてあげたいと思うのです。

牛は、接し方次第では暴れたりもするけど、本当はとてもやさしい動物だということを。子どもたちに、酪農は命を肌で感じることでできる職業だ。と、伝えたいです。そして、『酪農』に少しでも興味をもってもらいたいです。

そのためには、今学んでることを生かし、牛にかかるストレスを軽減する方法などを自分で導きだせるまでになりたいです。

今のところの目標は、子どもたちに命の大切さ、凄さを伝えることでできる酪農家になることです。私が出している知識を子どもたちに伝え、多くの酪農人を増やしていきたいです。そして、明日を引っ張る酪農人を支えられるような酪農家になりたいと考えています。